

第7回 東邦大学看護研究会学術集会を終えて

●メインテーマ：「魅力的な臨床看護の場づくり」

大会長／東邦大学医療センター大森病院副院長・看護部長 菊地 武子

師走にはめずらしくスコンと抜けるような青空と、生垣には季節外れの一輪の薔薇。玄関前の3本の欅はすっかり葉を落としていたが、東邦大学看護学科の小さな庭は朝の光を浴びて、躍動感と命のつながりを感じさせる。

美しいもの美しいと思えるゆとりと感性はまだ鈍っていない事を神様に感謝しつつ、平成19年12月15日、第7回東邦大学看護研究会学術交流会のオープニングを迎えた。

東邦大学看護研究会も、発足してはや7年。徐々に会員数を増やし、今年度は1465名を数えた。今回はその中から、非会員も含めて250名を超える参加があった。

一般演題は各施設から24題がエントリーされ、フロアとの活発な意見交換が行われた。「看護IC」や「看護の語り」等、看護を深く追求したものや、感染制御、退院支援といったチーム医療の中での看護師の果たすべき役割など、テーマは多岐にわたり、同時に研究の質も着実にレベルアップしていることが感じられた。個人でもグループでも一つのことを成し遂げた達成感は何事にも変えがたいものであり、大きな喜びであろう。この日々の喜びや感動が、今回のメインテーマである「魅力的な臨床看護の場づくり」の土台になっているということをつくづく実感させられた。

特別講演は、東京大学医科学研究所の田中祐次先生から「患者学」というテーマでお話いただいた。治療における生活情報などの知識は、患者から学んでいく

という姿勢が大切であること。また、「患者の思い」「家族の思い」「医療者の思い」をしっかり受け止め傾聴できるという点が看護師の大きな強みであること等、多くの示唆をいただいた。現場の思いを集め、もっともっと言葉にして学問にしていきたいという田中先生の熱い思いが伝わってきた。

フィナーレは「生き生きと仕事するために」と題して、シンポジウムを開催した。「自分らしさ」を見つけることの大切さ、深刻すぎる仕事の仕方ではなく「遊び心」を持って、人を喜ばせ、注意を向け、自分の態度を選ぶこと。人との出会いのすばらしさ、心触れ合うマナーの実践等、3名のシンポジストそれぞれの体験を通して語っていただいた。3名ともこれぞキャリアウーマンという感じで魅力にあふれ、あっという間の100分だった。

好きな仕事ができる場があるということはすばらしいことである。そして、その場が東邦大学であり、この素敵なか仲間達と今、この場を共有できることを誇りに思う。

今後もこの学術交流会を通して、同じ東邦人として刺激し合い、高めあい、称えあっていきたいものである。

最後に、激務の中、手作りで本会の準備、運営にあたられた委員の皆様に心から感謝申し上げたい。



第7回 東邦大学看護研究会学術交流会

メインテーマ「魅力的な臨床看護の場づくり」

●特別講演 メディキナ ノア 「Medicina Nova患者学」

講師

田中 祐次先生

(東京大学医科学研究所探索医療 ヒューマンネットワークシステム部門)



第7回東邦大学看護研究会特別講演に参加して

東邦大学看護学科 杉本 正子

特別講演は、田中祐次先生による「患者学」であった。本題に入る前に、先生のご略歴から「患者学」に行き着くまでの道程について伺いました。血液内科医師として患者さんの治療や研究に明け暮れた日々、Duke大学への留学と免疫療法の研究、そしてそれらの経験は「患者さんとの出会い」に繋がっていきます。先生はパリッと白衣を着て医師然としているよりも、もともと気さくで親しみやすいお人柄なのか、患者さんと一緒にお話されるのがお好きな…そんな医師でいらっしゃるようです。患者さんと病棟でふれあう楽しさ、そして患者会「もの木」の立ち上げなどの活動を通して、医師と患者との情報格差、医師が患者から情報をもらうことの重要性に先生は気づかされます。

医師が患者からそれらを学ぶことにより、医療は変わっていくと熱く語られました。そして医療者と患者側との間の存在する溝や壁を改善していくためには、「コミュニケーションの重要性」について述べられました。具体的に述べると、「コミュニケーションの重要性」とは、「患者や家族の思いを知ること」であり、先生が出会ったケースについて紹介されました。

急性骨髄性白血病で亡くなった20歳の男性、子どもをがんで亡くしたご両親、どちらも先生に訴えられたことは、「自分(あるいは家族である子ども)を忘れないで欲しい」という想いだったそうです。

また医療者から患者や家族への情報の伝達は、コミュニティや情報伝達手段の変化によって時とともに変わっていくと述べられ、医療者自らが患者や家族の集まる場に出向くことの大切さを強調されました。即ち患者や家族の情報伝達はリアルタイムで時空を越えた新しい伝達が大事であること、そのためには院内患者会(外来患者から入院患者へ)や患者会・講演会・交流会・ホームページやブログなど積極的に医療者から働きかける重要性を述べられました。その他、映像からの院内患者会や世話人連絡協議会の様子、そして患者学の研究、学会のご紹介などについて話され、聴衆の中から一人でも関心をもたれた方は、先生のメールへ…ということでお結びされました。その後のランチを兼ねた交流会にも最後までご出席頂き、会員との交流を楽しんで下さいました。先生の益々のご活躍を祈っています。

シンポジウム「生き生きと仕事するために」

—シンポジウム座長の体験から—

第7回東邦大学看護研究会学術交流会のシンポジウムは「生き生きと仕事するために」と題して、3名の講師をお招き致しました。金子朱実さんからは、「自分らしさ」を見つけることと題して、一般職から総合職へのチャレンジを通して、自分らしさ発見の楽しみ方を、大水美名子さんからは「フィッシュ」哲学を導入して、いきいきと活力の満ち溢れる職場作りの実践報告を、川崎美紀さんからは、心ぶれあうマナーの実践と



大橋病院看護部長 森田 啓子

題して、人との出会いの素晴らしさと感謝の気持ちを持つことの大切さ等、貴重な体験談をお話していただきました。

職場は自分の夢・価値・目的を形にしていく大切なフィールドのひとつです。与えられたチャンスを生かすためには、楽しく働きたいものです。直ぐ実行できるヒントがたくさん紹介されましたので、自分が出来ることを吟味して、自分らしく活用していただけることを期待しています。



シンポジウムに参加して

大森病院看護部 西池 清美

一般企業の「女性活躍推進チーム」の中心として活躍中の金子朱美氏からは、『自分の限界という“タグ”をつけていませんか?…そして、ゼロスタートがいつでも出来る心構えが大切ですよ』と。

歴史ある大学病院の危機的状況下に「フィッシュ哲学」を導入し、ピチピチした活気ある環境作りを実践中の大水美名子氏からは、『仕事を楽しむ組織風土づくりの実際』を紹介して頂き、当院におけるフィッシュ活動を振り返る機会となりました。当院もまた「フィッシュ哲学」が“感染したり、伝染したり”してじわじわと活動中です。

接遇インストラクターとして活躍中の川崎美紀氏からは、接遇の基本となる5つのS【Smile(微笑み)、Speed(速く)、Smart(洗練されている)、Study(研究)、Sincerely(誠実に)】についての紹介がありました。そして『人間関係は笑顔から…』はたいへん印象深く心に残りました。即、実践あるのみです。

私は、それぞれの立場で生き生きと、そして、魅力的にご活躍中の“その人となり”に触れることができ、一歩前進するための大きな勇気を頂いたように思います。

そして、実は私のまわりにも“魅力的で生き生きとした東邦の仲間たち”がたくさんいることに気づき、とっても嬉しかった瞬間もありました。

「魅力的な職場づくり」を目指して

佐倉病院看護部 鈴木 康美

3名の素敵な女性シンポジストによるプレゼンテーションを聞いて、それぞれ活躍する場所は違うけれど、多くの問題を抱えながら女性が生き生きと仕事をしている様子を知り、大変心強く思った。ライフスタイルや家族の様々な問題、組織の中で同僚・上司・他の職種と人々との問題で苦労しているのは、看護師ばかりではないことを今更ながら実感した。

このシンポジストの中で、大水氏が取り組んでいる「fish哲学」には関心があり、大変参考になった。今回の交流会の場所の飾りつけは、fish哲学に基づいたもので、楽しい雰囲気になっていた。同じ仕事をするのならば、「たのしくする」「いやいやする」どちらの態度を選ぶのか、答えはわかっていても上司から言われるのではなく、自分が態度を選択することにポイントがある。患者に対する接遇の重要性と新人のコミュニケーション能力の低下に大きな隔たりがあり、現在、新人教育の課題となっている。その対策として、是非参考にしていきたい。誰もが、良い仕事をしたいと思い、できれば楽しく働きたいと考えている。そんな魅力的な職場にできるように、努力していきたい。

学術交流会を終えて

企画運営委員長 大森病院看護部 菊地 京子

皆様！ 第7回東邦大学看護研究会はいかがでしたでしょうか。

平成19年度の学術交流会の企画・運営を大森病院が行なうことが決まり、4月19日に初回の企画会議を開いてから、アッという間に8ヶ月が過ぎ、当日になったような気がします。参加してくださった皆様は、ご満足して頂けたのでしょうか。参加者は265名でした。

企画の中で、苦労したことは、メインテーマを決めるのことでした。過去のテーマを振り返り、今、看護界が重要課題としているテーマを念頭に置き、現場からの意見を取り入れながら、話し合った結果、「自分たちが、どうしたら忙しい臨床の中で生き生きと働いていけるのだろうか?を考える場としたい」というねらいで、【魅力的な臨床看護の場づくり】としました。

特別講演・シンポジウムも同様に悩みましたが、皆様のご協力で、違う立場の方々から幅広いお話を聞きることができ、良かったと思っております。私個人としてですが、少し軽い足取りで、出勤できるような気がしましたが、皆様はどうでしたでしょうか？

演題は、教育の場での課題、臨床での振り返りや課題等広範囲なテーマであり、今後も継続して欲しいものや、それぞれの場で活用できるものも多くあり、とても有意義でした。

企画担当は、大枠のスケジュールと3回の運営委員会の日程を決めましたが、各担当責任者および副責任者がリーダーシップを発揮し、役割を全うして頂きました。皆様に感謝申し上げます。会を重ね、看護学科・佐倉看護専門学校・大橋病院・佐倉病院・大森病院のチームワークの良さを痛感しました。益々の発展を期待しております。



第7回 東邦大学看護研究会学術集会 会場風景

東邦大学看護研究会に参加しませんか？

年間費：2,000円

年1回 看護研究学術集会 ニュースレターの発行

私たちにとって最も身近な看護研究会です。

施設を超えて交流ができ、沢山の学びがあります。

外部の方の参加も可能です。

編集後記

うららかな春の日ざしが楽しめるようになりました。皆様お元気でお過ごしでしょうか？

ニュースレターも第10号の発行となりました。看護研究会の会員および学術交流会の参加者も徐々に増えつつあります。これからも、前向きに進んでいきたいものです。

担当者

第10号ニュースレター事務局

東邦大学医学部看護学科 精神看護学研究室 山城 久典
〒143-0015 東京都大田区大森西4-16-20

TEL 03-3762-9881 (内334)

FAX 03-3766-3914 (代)

E-mail: yamahisa@med.toho-u.ac.jp